

天然ニホンウナギ資源管理研究

(予算区分 受託 研究期間 平成27～30年度)
担当：水産技術研究所浜名湖分場 鈴木基生

【研究の背景とねらい】

- ・ニホンウナギ（以下、ウナギ）は、平成26年6月に国際自然保護連合が絶滅危惧種に指定するなど資源の減少が危惧されていますが、天然ウナギについては生態など基礎的な情報が少ないのが現状です。
- ・河川に遡上せず一生を海域で過ごす「海ウナギ」は、ウナギの再生産に大きく寄与している可能性が指摘されており、その生息状況や生態は解明すべき課題です。
- ・当场では、水産庁の「河川及び海域での鰻来遊・生息調査事業」に参画し、最下流部に浜名湖という海域を有する都田川水系をフィールドとして、海域に生息するウナギを主体に生態や漁獲実態など基礎的な知見の蓄積を進めています。

【これまでに得られた成果】

(平成27年度の成果)

- ・浜名湖では、ウナギは主に小型定置網とうなぎ壺（筒）で漁獲されており、これらの漁具で漁獲されるウナギの全長範囲はほとんど変わらないものの、秋季に産卵に向かう親ウナギ（銀ウナギ）は専ら小型定置網で漁獲されることが分かりました。

(平成28年度の成果)

- ・成長期のウナギ（黄ウナギ）について調査したところ、河川下流域がウナギの初期成育の場と同時に雄の生息場所であるのに対し、海域（浜名湖）は淡水域とともに雌の生息場所であり、水域によって生息場所としての役割が違ってくるということが明らかになりました。

(平成29年度の成果)

- ・ウナギの漁獲状況から、砂泥底にはウナギが定着しやすく、海域（浜名湖）における主な漁場になっているのに対し、アマモ場や砂底には、季節的に移動してきたウナギが一時的に留まり、それが漁獲されていると考えられました。
- ・浜名湖のウナギについては、数十年にわたる漁獲量データが蓄積されており、中でも各年の10～12月の漁獲量は銀ウナギ漁獲量の年変動の指標となることがわかってきました。



砂泥底ではウナギ（矢印）は容易に巣穴を作ることができる

【期待される効果】

- ・都田川水系における天然ウナギの生態や漁獲実態が明らかとなり、天然ウナギ資源の管理方策立案に活用されます。

【今後の計画】

- ・より小型のウナギについても調査を進め、来遊してから銀ウナギとして産卵場に向かうまでのウナギの分布や生態について明らかにします。
- ・底質や植生の違う生息場所について、餌の供給の面からも評価を行い、海域でのウナギの生息環境保全に繋がる知見の集積を図ります。

(作成 平成30年4月)